

『心中宵庚申』

生涯に二十四編の世話物を書いた近松門左衛門による、二十四番目の世話物です。享保七年（一七二二）四月二十二日から大坂・竹本座で初演されました。夫婦の心中という、珍しい題材を扱います。

大坂の八百屋半兵衛に嫁入りしたお千代（千世）は、武家出身の半兵衛が実父の墓参のため郷里浜松へ出かけている間に姑に離縁され、妊娠五ヶ月の身を実家である山城国上田村の豪農島田平右衛門宅に戻されます。浜松で男色がらみの争いを鮮やかに裁いてきた半兵衛は、大坂への帰途、偶然に上田村へ立ち寄って初めて事情を知り、平右衛門の意見も受け、必ず添い遂げることを約してお千代を連れ帰ります。しかし、お千代を常磐町の従兄弟に預けたことは、すぐに姑の知るところとなります。半兵衛は、「姑去りの汚名をそそぐため、いったんお千代を家に戻してから改めて離縁したい」と姑の説得を試みるものの、姑は「母殺すか、女房去るか」と態度を変えません。八百屋に戻ったお千代に、半兵衛は離縁を申し渡して心中の覚悟を固めます。やがて家を抜け出た二人は、生玉馬場先の大仏勧進所で心中を遂げるのでした。

土田衛氏が発見された大阪下寺町銀山寺の過去帳に、「油掛町八百ヤ半兵へ妻／山城上田村平右衛門妹也」とある二十四歳の女性が千代のモデルと思われ、「離身童子」と胎内の子どもの戒名も記録されています。同じ事件をモデルに豊竹座の紀海音も、近松より早く「心中二つ腹帯」を書いています。事件のモデルとなった八百屋夫婦の墓石は銀山寺に現存していて、命日は「享保七寅年四月六日」と劇中の設定と同じです。暦の本によりますと、正にこの日が庚申にあたっているのです。

上中下の三巻で「上田村」が中の巻、「八百屋」が下の巻、現在の上演形式は昭和四十年（一九六五）十一月朝日座での復活上演に拠っています。それ以前、昭和七年十月に四ツ橋文楽座で食満南北の脚色によって上演されていますが、昭和四十年の復活は原作通り。

近松の世話物で大正昭和以前からの伝承を繋いでいる作品は実は少ないのですが、この『心中宵庚申』上田村の段と『心中重井筒』六軒町の段は、その数少ない貴重な場面で、ともに伝承の要にあったのが八代目竹本綱太夫と十代目竹澤彌七のコンビです。昭和四十年十一月朝日座での復活上演に先立って、四十年五月二十三日にはNHKでスタジオ収録の「上田村」が放送され（映像は現存）、平右衛門の首は、それまでの「武氏」から、頑固さと愛情を兼ね備えた豪農らしい綱太夫の造形にあわせて「舅」に替えたとのことでした。

一人遣い時代の文章、しかも上演が少なかったため後世の工夫が少なく、九代目綱太夫のちの九代目源太夫によると、「山もなし谷もなし、はじめからしまいまで淡々としてて、そん中に渋い情愛をにじみ出さなあかん」、「余計な説明なしにズバズバ行く」ところの多い運びが特色です。

「八百屋の段」は、母を純然たる敵役とする『八百屋献立』という増補改

作ものが上演されていました。昭和四十年の原作通りの復活にあたって、二代目野澤喜左衛門があらたに作曲したのが現在の曲で、復活初演の四代目竹本越路太夫が磨き上げた昭和の名曲といえましょう。越路太夫は「世話の運びとコトバ」が肝要、と言いついて残しています。

題名にもなった「宵庚申」というのは、庚申待ちの前夜をいいます。八百屋の段の設定は四月五日。十二支と、甲・乙・丙・丁……の十干を組み合わせた六十通りで、年だけでなく、月日もについています。庚申（かのえ・さる）の日は、一年に六回ありますが、眠ってしまうと短命になるとされ、神仏を祀って徹夜する習慣が「庚申待ち」。明日は庚申待ちという前の晩に、夫婦で家を「さる＝申＝猿＝去る」のです。

（児玉竜一）